Webアプリ エンジニアへの予備知識

～　ソフト０８ ＷＥＢエンジニア化プロジェクト資料　～

目次

[１　はじめに 3](#_Toc70073827)

[２　Webアプリの概要 4](#_Toc70073828)

[２．１　WebサイトとWebアプリ 4](#_Toc70073829)

[２．２　サーバサイドとクライアントサイド 5](#_Toc70073830)

[２．３　ＨＴＭＬとＣＳＳとＪａｖａＳｃｒｉｐｔ間の関係 9](#_Toc70073831)

[２．４　フレームワークとは 11](#_Toc70073832)

[２．５　Webエンジニアとして必要な知識 12](#_Toc70073833)

[３　開発環境 13](#_Toc70073834)

[４　画面デザインについて 14](#_Toc70073835)

[５　HTMLのルール 15](#_Toc70073836)

[６　CSSのルール 16](#_Toc70073837)

[７　DOMとは 17](#_Toc70073838)

[８　ＪａｖａＳｃｒｉｐｔのルール 18](#_Toc70073839)

[９　HTMLファイルを作成してみる 19](#_Toc70073840)

[１０　CSSファイルで見た目を整える 20](#_Toc70073841)

[１１　画面レイアウトを切り替える 21](#_Toc70073842)

# １　はじめに

　普段利用しているスマートホンやPCで見ている、ホームページやグーグルマップなど、ブラウザで見ているものの多くは、画像データや動画データ、HTML、CSS、JavaScriptなどを組み合わせて作成されています。

　Webアプリについては、２．２で説明します。

　ＨＴＭＬ、ＣＳＳ、ＪａｖａＳｃｒｉｐｔの説明は、２．３項などで説明します。

　Webアプリに対する需要は多く、対応できるエンジニアへの育成環境も急務となっています。

　エンジニアがある程度増えれば、チームとして業務を受注する事もできる筈・・・です。

　ＷＥＢサイト作成には、幅広い知識が必要となるため、最初は広く浅く覚えておき、用途に合わせて調べましょう。

　ＪａｖａＳｃｒｉｐｔの規格は、ここ数年、毎年更新されています。　本格的なエンジニアとなった際は、最新情報に気を付ける事が重要です。

ただし、ビギナーはやはり基本が大事！！各種入門書で地力を付けましょう。

　本資料では、各々のベースとなるような考え方、Webエンジニアになるための予備知識レベルのものを紹介します。

　Webエンジニアへの一歩を踏み出す助けになれれば幸いです。

# ２　Webアプリの概要

# ２．１　WebサイトとWebアプリ

　WebサイトとWebアプリの間に明確な線引きはありませんが、ざっくりした切り分けはあります。

Webサイト：静的なページ。情報提供するだけのホームページやWebページを指します。

　　ＨＴＭＬとＣＳＳで、表示する内容とデザインをＷＥＢブラウザに伝えます。

例：　ウィキペディアなど。（宣伝部分は除く）

Webアプリ：本来静的なWebサイトを、動的に加工します。（注　動画にする訳ではありません。）

ユーザの操作や時間経過などをイベントとして捉え、イベント発生時のプログラムを定義し、ページ内の内容を変更します。

データベースサーバと連携し、検索を行ったり、ボタン操作でメニュー表示の切り替えを行ったりと、プログラマブルに様々な制御を行います。

クライアント側で操作する場合は、WEBブラウザの内部データ（DOMデータ、DOMツリーとも呼びます）の内容を書き換えることで、表示を変更します。

サーバ側で操作する場合は、クライアント側に送信するHTMLデータそのものを変更することも出来ます。

Webアプリは、Webブラウザが有れば表示出来るため、インストールは行いません。

　　　　　　 　例：　検索サイトなど。

アプリ、ネイティブアプリ：通常のアプリです。

App Storeなどでインストールして用います。

　例：　新型コロナ感染防止アプリ“ＣＯＣＯＡ”など

　Webアプリエンジニアは、Webアプリの開発を行います。

　又、Webアプリエンジニアには、フロントエンドエンジニアとバックエンドエンジニア（又はフルスタックエンジニア）がいます。

　フロントエンドエンジニアは、端末側により近いため、デザイン関連の知識が必要になります。

　バックエンドエンジニアは、サーバの配置や保守など、システム全体に及ぶ知識が必要になります。

　何れも幅広い知識が必要となり、人手が不足していると言われています。（需要大。）

# ２．２　サーバサイドとクライアントサイド

1. 一般的なWebサーバの動き

ブラウザのアドレス欄にＵＲＬを指定すると、リクエスト情報（※）がＷＥＢサーバに送信され、ＷＥＢアプリなどに通知されます。

ＷＥＢアプリなどは、要求された内容を元に情報収集し、要求されたリソース（ＨＴＭＬやＣＳＳなど）をレスポンス情報（※）としてブラウザに返信します。

通常、このやり取りを何度か行い、１つのＷＥＢページが表示されます。

* リクエスト情報とレスポンス情報も、後で説明します。

WebブラウザでＵＲＬを指定した時の動き

Webサーバなど

リクエスト

（ＵＲＬ、要求元アドレスなど）

クライアント側（Webブラウザ）

Web

アプリ

レスポンス

（ステータス、ＨＴＭＬデータ、要求元アドレスなど）

データベースサーバ

Web

アプリ

JavaやJavaScript、PHP、Python、Rubyといったプログラミング言語があり、

　時々、”フロントエンド”、”バックエンド”と言う表現を使いますが、端末側を“フロントエンド”または“クライアントサイド”、　サーバ側を“バックエンド”または“サーバサイド”と呼びます。

フロントエンドでの開発で使う言語は主に、HTML、CSS、JavaScriptです。

バックエンドでの開発で使う言語は、JavaやJavaScript、PHP、Python、Rubyといったプログラミング言語があり、開発効率を高めるための各種フレームワークを利用して開発が行われます。

　通常のＷＥＢアプリは、サーバ側でデータを編集し、端末側にＨＴＭＬデータなどを送り返しますが、リクエストの都度やり取りが発生するため、画面表示に遅延が発生することが発生しています。

　このため、一部のフレームワークでは、端末側でレスポンスを編集するものも出てきています。

1. フロントエンドでのＷｅｂアプリ（ＶｕｅＪＳなど）

WebブラウザでＵＲＬを指定した時の動き

Webサーバなど

データベースサーバ

Web

アプリ

クライアント側（Webブラウザ）

Web

アプリ

Web

ブラウザ

リクエストとレスポンスは、端末内で折り返す。（ＨＴＭＬなど）

Web

アプリ

Ｗｅｂアプリ間では、データだけやり取りする。

フロントエンドのフレームワークは、ＪａｖａＳｃｒｉｐｔで開発します。

1. リクエスト情報やレスポンス情報について
2. URLについて

URLは、Webサイトのアドレスのようなものです。

ブラウザでURLを指定すると、Webサーバなどの一意な場所が指定され、データを返信します。

＜ＵＲＬでの指定の例（ＣＹＮＣＳトップページ）＞

　④

https://cyncs.technopro.com/ctec.html

　　　　　　　　③　　　　　　　　①　　　　　　　　　　②

1. ドメイン名（ＩＰアドレスをＤＮＳサーバで置き換える）
2. ディレクトリ名 or ファイル名。
3. プロトコル
4. ＵＲＬ (Uniform Resource Locator)

単純なＷＥＢサイトの場合、②の部分はフォルダ構成、ＨＴＭＬファイル名と一対一になります。

＜公開フォルダ内の構成＞

（公開フォルダ）\index.html ・・・　メニューページ

　　　　　　　　　　\ctec.html　　 ・・・　ＤＳ用ページ

　　　　　　　　　　\home\demo.html　　 ・・・　デモページ

＜ＵＲＬでの指定＞

<https://cyncs.technopro.com/index.html> ・・・　メニューページのＵＲＬ

[https://cyncs.technopro.com](https://cyncs.technopro.com/index.html) ・・・　メニューページのＵＲＬ（省略時）

<https://cyncs.technopro.com/ctec.html> ・・・　ＤＳ用ページのＵＲＬ

<https://cyncs.technopro.com/home/demo.html> ・・・　デモページのＵＲＬ

また、②の部分には、ページへの付帯情報を追加することが出来ます。

ページデータ要求（クエリ）に付ける情報のため、“クエリパラメータ”と呼びます。

＜クエリパラメータを使用したＵＲＬの例＞

[ｈｔｔｐ：//○○/△△/](http://○○/△△/)ｉｎｄｅｘ？ｎａｍｅ＝ｈｏｇｅ＆ａｄｒ＝ｓｅｎｄａｉ

Webアプリ(index)へ、“ｎａｍｅ＝ｈｏｇｅ、ａｄｒ＝ｓｅｎｄａｉ”を渡す。

　　ただし、クエリパラメータを多用すると、ＵＲＬが長くなってしまいます。

＜検索サイトで”technopro”を検索した時のページのURL＞

https://www.google.co.jp/search?q=technopro&sxsrf=ALeKk029oT4LVpqg8IYxQTsUmiehXgusg%3A1619150247553&source=hp&ei=p0WCYImiH4vWmAX9tqnwBQ&iflsig=AINFCbYAAAAAYIJTt6QTBmpLYAbqWenDNsqw\_zaLugyp&oq=technopro&gs\_lcp=Cgdnd3Mtd2l6EAMyAggAMgIIADICCAAyAg　・・・

# ２．３　ＨＴＭＬとＣＳＳとＪａｖａＳｃｒｉｐｔ間の関係

1. 概略図

＜Webサイトの元イメージ（一ページ分）＞

**タイトル**

・・・・・・・

・・記　事・・

・・・・・・・

内容に合わせてタグを付ける

＜ＣＳＳファイル＞

h1 { ← ｈ１タグを選択

color =”green” (文字をgreenで指定)

}

p { ← ｐタグを選択

font size=”16px” (文字ｻｲｽﾞを16pxで指定)

｝

＜ＨＴＭＬファイル＞

<h1> ←（大見出しタグ開始）

“タイトル”

</h1> ←（大見出しタグ終了）

<p> ←（段落タグ開始）

・・・記　事・・・

</p> ←（段落タグ終了）

<img “src=(図の参照元)”>

コンテンツの見た目を指定

　　＜ＤＯＭイメージ＞

html

h1

　　“タイトル”

　　　　color : ”green”

　　p

　　　　“・・・記　事・・・”

　　　　font size : “16px”

Webブラウザが、HTMLとＣＳＳを解析してＤＯＭツリーを生成

WebブラウザがＤＯＭの内容を画面に表示

イベント発生時にＤＯＭの内容を書き換える

＜ＪａｖａＳｃｒｉｐｔファイル＞

let kiji = document.getElementByTagName(“p”);

（DOMのＰﾀｸﾞ要素を指定）

kiji.addEventListener("mouseover",function( event )

(Ｐﾀｸﾞにﾏｳｽが重なった時のｲﾍﾞﾝﾄで、実行する)

{

event.target.style.backcolor = “orange”;

(記事の背景色をorangeに変える)

｝;

**タイトル**

・・・・・・・

・・記　事・・

・・・・・・・

　Webブラウザで表示しているページは、基本的に３つの概念で成り立っています。

1. 内容（コンテンツ）
2. 表現（プレゼンテーション）
3. 動作（ビヘイバー）

　内容はＨＴＭＬ、表現はＣＳＳ、動作は主にＪａｖａＳｃｒｉｐｔが相当します。

1. 内容（コンテンツ）

Webブラウザに表示したい文章（記事）や写真、動画などを指します。

ただし、そのまま張り付けただけでは、それが記事なのか、メールアドレスなのか、図なのか、Webブラウザでは判別できません。

このため、“タグ（意味のあるマーク）”と“属性（付帯情報）”を使って、書かれている内容に意味づけするなど、グループ分けなどを行います。

ＨＴＭＬファイルは、一ページ一ファイルで作成します。

1. 表現（プレゼンテーション）

文字サイズや配色、表示レイアウトなど、コンテンツの見た目を指定します。

コンテンツに付けられたタグを使って対象を決め、対象の文字サイズや色、書体やフォント指定、背景色などを変更します。

また、コンテンツ間の並び方（右寄せ、左寄せ、均等割付、折り返し有無、折り返し方向など）なども指定します。

基本的には静的な定義ですが、画面幅を取得することで、スマートホン用のレイアウトとＰＣ用のレイアウトを指定することもできます。

上記指定は、ＨＴＭＬ内に埋め込むことも出来ますが、規模が大きくなるにつれ煩雑になり、保守性が大きく下がってしまうため、ＣＳＳで制御するのが一般的です。

ＣＳＳファイルは、ＨＴＭＬのheadタグ内で読み込みます。（複数可）

1. 動作（ビヘイバー）

内容と表現に対し、イベント（ユーザの操作など）に対応した振る舞いを定義します。

ＨＴＭＬとＣＳＳでも、ページの移動やレイアウトの変更、背景色などを変更することもできますが、変更できる機能は限定的です。

ビヘイバーでは、WebブラウザがＨＴＭＬを読み込んだ際に内部作成されるＤＯＭ**（※１）**を使い、ＪａｖａＳｃｒｉｐｔなどでタグや属性状態を調べるなど、内容を書き換えることにより、表示内容を動的に変更します。

ＪａｖａＳｃｒｉｐｔファイルは、ＨＴＭＬのheadタグ内で読み込みます。（複数可）

※１　ＷＥＢブラウザの内部データで、これを元に表示します。ツリー構造のデータ。

# ２．４　フレームワークとは

# ２．５　Webエンジニアとして必要な知識

　Webエンジニアになるため、下記の知識習得が必須になります。

　１　HTMLの基礎知識

　２　CSSの基礎知識

　３　ＪａｖａＳｃｒｉｐｔの基礎知識（DOMの基礎知識含む）

　あくまでも“基礎知識”です。全てを覚えると大変時間がかかりますので、必要知識の範囲外とします。

　その代わり、感覚を掴むために、各々の入門書を２～３回読み直しましょう。

　通しで読み直すと、各々の関連性が見えてきます。

　ＶｕｅＪＳなどのフレームワークでは、便利な機能を搭載していますが、基礎知識があることが前提です。

　フレームワークで生成されるのは、車でいえば車体だけ。製品にするには、塗装をしたり、エアバッグを付けたり、カーナビを付けたりと、仕上げ作業が必要です。

　基本が判らないと、『言われたことしか出来ない』どころか、『言われたことが判らない』ことになります。（仕事になりません。）

　色付けなどで悩まなくて良いよう、基本をしっかり身に付けましょう。

# ３　開発環境

# ４　画面デザインについて

『ＷＥＢサイトのデザインは、ＷＥＢデザイナーが決める！！』　が理想だと思いますが、個人或いは小規模な物件などは、エンジニアがデザイン決めから作業することがあるかもしれません。

大まかなデザイン決めの流れを説明します。

# ５　HTMLのルール

# ６　CSSのルール

# ７　DOMとは

# ８　ＪａｖａＳｃｒｉｐｔのルール

# ９　HTMLファイルを作成してみる

# １０　CSSファイルで見た目を整える

# １１　画面レイアウトを切り替える